

# 家族援助についての考察 (I)

## —家族観に関する調査を通して—

木 暮 美 香

### 概 要

児童福祉法の一部改正により、登録に併せて、保育士の守秘義務や資質向上のための努力義務が規定された。保育士の業務としては、保護者に対する保育指導も新たに明記され、この改正を受けて保育士養成課程においても「家族援助論」が開設されるなど、子ども・保護者も含む「家族」に視点をあてた取り組みが必要な状況となってきた。多様化する保護者を含め、子どもたちを取り巻く「家族」の現況を知り、理解することから家族援助や子育て支援は始まると考え、本研究では、現代家族の姿を考察し、併せて、保育士を目指す学生自身の家族観を調査することで、保育士養成課程における家族援助のあり方についての示唆を得たいと考えた。

調査は、本学保育学科保育専攻の1年生と群馬県内の私立専門学校医療福祉系学科の同じく1年生を対象に実施、家族構成やそれぞれの家族に対する思いなどを含めた家族観についての聞き取りを行った。その実態調査からは、保育士志望学生の結婚も含めた家族観の一側面の部分を引き出すことができた。子どもが好きという気持ちの表れが随所にみられ、また、現在において、自分の家族に対して好意的な感情をもっていることから、学生自身が「家族」というものを良いイメージで捉えているとみることもできた。

特に産業基盤の変化がもたらした現代家族への負荷は深刻で、家族の定義や概念も複雑で多様化している。しかし、それはその人自身が自分の家族の中で育ち、成長する過程において、意味付けをしていくものであるともいえる。保育に携るものが、どのような家族観をもっているのか、といったことも家族援助を考える上での切り口となるのかもしれない。

### 1. はじめに

2001年に一部改正された児童福祉法<sup>1)</sup>において、保育士資格が名称独占資格として規定された。同法第6節第18条の4に「この法律で、保育士とは、第18条の1第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とするものをいう」とあるように、2003年4月より各都道府県における登録制度が施行されている。ここで注目すべきは、資格の法定化とともに保育士の業務として、児童のみならず保護者に対する保育指導が新たに明記された点であろう。「児童福祉法の一部を改正する法律等

の交付について」<sup>2)</sup>では、その業務の位置付けの理由を「都市化、核家族化の進展に伴い、子育ての基盤となる家庭の機能が低下している中で児童の健全な成長を図るためには、児童福祉施設のみならず家庭でも適切な保育が行われる必要があることから」としている。

この改正を受け、登録に併せて、保育士の守秘義務や資質向上のための努力義務も規定された。同じく児童福祉法第48条の2第2項には、「保育所に勤務する保育士は、乳幼児に関する相談に応じ、助言を行うための知識及び技能の修得、維持及び向上に努めなければならないこと」とある。このことは、既に保育所に勤務する保育士のみならず、保育士養成課程の見直しにもつながってきてい

る。2003年現在、本学保育学科において開講されている「家族援助論」「社会福祉援助技術」「カウンセリング」「教育相談研究」等の科目は全て、児童・保護者を含めた「家族」を視野に入れた教授内容となっている。

基本的に「子どもが好き」で保育士を志す学生が、実際に保育現場に出て気付くのは、いかに「大人」とのかかわりが多いかということではないだろうか。図1に示す通り、保育所における保育士の日々の人間関係は、決して子どもとのかかわりだけで成り立っているわけではない。職場の同僚との、また保護者との間に良い人間関係が築かれていれば、それは協力や連携をスムーズにさせ、結果、児童の保育にあたっては効を成すと考えられる。

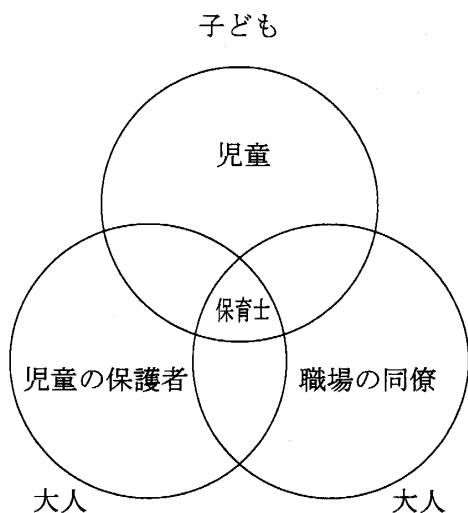


図1 保育所における一保育士の人間関係

同一の保育所という場を通じて、そこに集う人間は様々である。保育士であっても、年齢、経験、立場、性格が違えば、それはまた保育方針や保育方法等にも影響するであろう。保護者も同様に一人一人違えば、子育てに対する意識もそれぞれであるに違いない。その多様化する保護者を含め、子どもたちを取り巻く「家族」の現況を知り、理解することから家族援助や子育て支援は始まると考える。

従って本研究では、現代家族の姿を考察し、併せて、保育士を目指す学生自身の家族観を調査す

ることで、保育士養成課程における家族援助のあり方について考えるきっかけとしたい。

## 2. 現代の家族

現代の「家族」は今、激動の中にあるといえるだろう。家族を取り巻く社会環境は、刻々と変わりつつある。2002年（平成13年度）に内閣府がまとめた国民生活白書<sup>3)</sup>では、「家族」を切り口として、「家族の暮らしと構造改革」という副題の基に国民のライフスタイルに関する検討が行われた。ここでは、その調査結果から見えてきた現代家族の姿について考えてみたい。

まず、家族を巡る潮流変化として「家族の機能」には、大きく分けて、①生活の糧を得る機能、②子どもを生み育てる機能、③老親等の介護や扶養をする機能、④休息・やすらぎを得る機能の4つがあるといわれている<sup>4)</sup>が、「現在においては、それらの家族機能が大きく変化している」ということが指摘されている。

はじめに、①の生活維持機能の変化として、戦後から現在までの家族における働き方の変化があげられている。具体的には、就業構造の変化（戦後の高度経済成長、第3次産業就業者の増加、バブルの発生と崩壊、リストラの動き、完全失業率の上昇、IT技術革新など）やサラリーマン世帯における収入構造の変化（女性の雇用拡大、家庭内労働の省力化と外部化、夫の雇用環境の変化、高度成長期には多かったサラリーマン世帯の専業主婦数の減少など）、そして夫婦の役割分担に対する意識の変化（従来型の「男は仕事、女は家庭」という男女の役割分担に同感しない人の割合は高まってきている、しかし、その実態としては実際に家事を分担している男性は少ない）などである。

次に、②の生命維持機能の変化にあたっては、進む少子化と高まる離婚率が大きな問題として取りあげられている。同生活白書「初婚率と出生率の推移」からは、結婚しても子どもを生まなかったり、生む数を減らしている現状があることがう

かがえる。また、「兄弟姉妹構成の推移」からも、80年代後半以降に一人っ子が増加傾向にあることが見て取れた。子どもを持つことに対する意識も変化しており、子どもを欲しい理由としては年齢層が高いほど「人間として自然」と答えたのに対し、若い世代ほど「子どもがかわいいから」が多い結果となっていた。「子どもを持つことについて否定的ではないけれど、必要性については、若い世代を中心に、必ずしも必要でないと思う人が多い傾向にある」(結婚しても子どもを持つ必要がないと考える生徒または学生の割合は、「全くそう思う」が26.5%、「どちらかといえばそう思う」が25.0%、「どちらともいえない」が34.8%であり、「どちらかといえばそう思わない」が7.6%、「全くそう思わない」が5.3%、「無回答」が0.8%という結果であった)ということも少子化を進行させる一要因になっていると考えられる。同じく、出生率低下の原因について聞いた調査データでは、「子育ての費用負担が大きいから」が一番多く、理想の数だけ子どもを持てない理由についても「子どもを育てるのに金がかかる」を筆頭に、育児に対する負担感が顕となる結果となった。晩婚化の傾向は、初婚率の推移からも明らかであり、2000年の平均初婚率は男性が28.8歳、女性が27.0歳と年々上昇が続いている。それと同時に未婚率(15歳以上人口に占める未婚者の割合)も2000年では男性が31.8%、女性が23.7%と上昇傾向にある。結婚することに対する意識の変化については、内閣府「国民生活選好度調査」(1997年)<sup>4)</sup>の結果によると、結婚することの利点として、「精神的な安らぎの場が得られる」「人間として成長できる」「一人前の人間として認められる」といった回答が多く、一方で結婚することの不利益については、「やりたいことの実現が制約される」「自由に使えるお金が減ってしまう(男性における回答の割合が高い)」「家事、育児の負担が多くなる(女性における回答の割合が高い)」といった意識があることが明らかとなった。そして、結婚しなくても満足の

いく生活ができると考える人の割合は若年世代で多いという結果も得られた。結婚観も変化しつつあるように、近年の離婚率上昇の背景には、離婚に対する人々の意識の変化も関与している。特に、若い世代ほど離婚率は高くなっているが、婚姻期間20年以上の熟年離婚が年々増加傾向にあることも離婚観の変容を裏付けている。

③のケア機能の変化については、進む高齢化の問題が関連付けてあげられている。65歳以上の人口比率が2020年では27.8%に、2050年では35.7%になることが見込まれており、本格的な高齢化社会に突入したことを表している。しかし、高齢者のいる世帯が増加する一方で、高齢者と子どもとの同居率は年々低下傾向にあるという小世帯化の事実も気にかかる点である。さらに、介護を受けたい場所は年齢が高くなるほど在宅が多く、住み慣れた家で介護を受けたいと思う人が多いことから、家庭や家族のケア機能の重要性は顕在であるといえよう。しかし、実際には核家族化や小世帯化の進行に伴って、家族の支援が得られにくい中においては、家庭以外の、例えばケアハウスのような高齢者が住みやすい住宅の普及も必須であると考えられている。

そして最後に、④のパーソナリティ機能の変化に関しては、家族と過ごす時間の減少が指摘されている。内閣府「国民生活に関する世論調査」(2001年)<sup>5)</sup>によれば、家庭はどのような意味をもっているのかという問いに対し、「家族の団らん」の場」「休息・やすらぎの場」「家族の絆を深める場」といった回答が多く、日常生活における家族の精神的つながりが重視されているということがわかっている。しかし、そうした意識とは反対に、家族で過ごす時間は実際には短いということが、NHK放送文化研究所の「国民生活時間調査」(2000年)<sup>6)</sup>からも明らかであり、その理由として両親の労働時間と帰宅時間の問題、子どもの塾通い等による夕方以降の在宅時間の減少、部屋の個室化などがあげられている。そして、一緒に過ご

す時間の減少に伴い、親子の絆に関する意識も変化しており、特に年齢が高いほど親子の絆の弱まりを感じている割合が多いという結果が得られている。

このように、家族機能が変化している状況から、共通する変化の方向性として、形態面での「小世代帯化の進行」及び意識面での「家族観の多様化」の2点が注目されている。そして、そこから導き出された指摘すべき点の1つに以下のような内容が述べられている。

若年層を中心に、自由で多様な家族観を持つ傾向が目立ち、特に結婚することや子どもを持つことを必ずしも必要と考えない傾向がみられることである。これについては、結婚することにより自由が制約されることや育児に対する負担等が影響していると思われる。特に、近年その負担の重さが指摘されている子育てについては、社会全体で支援することが重要である<sup>3)</sup>。

家族観や育児観に影響を及ぼす実際の社会状況の様々な要因があることは確かであるが、ここでも子育て支援の必要性が求められている。核家族化、都市化、人間関係の希薄化、いずれも身近で子育てを支えてくれる人の減少をもたらす。育児不安をかかえる親の増加、児童虐待の増加、そのような社会の流れの中で、保育サービスに対するニーズの高まりは、かつて以上に期待されるようになってきた。実際、延長保育や一時保育、休日保育、乳児保育、地域子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、子育てサロン、子育てサークルなど、様々な取り組みがなされているが、いずれの場合においても、重要なのは「人と人とのかかわり」が基盤となっていることであるといえよう。支援する側、される側という関係性を越えて、互いを思いやることが全ての根底にあるとするならば、子育て経験のない保育士が子育て中の親の気持ちを理解するということは、決して容

易なことではないが、常に相手の気持ちに寄り添う姿勢は大切であると考えられる。そのことから保育に携るものとして、現代の家族の置かれている状況と今後の方向性を広い視野から捉えておく必要があるだろう。

### 3. 学生の家族観

#### (1) 調査の目的

保育士を目指す学生は（勿論、幼稚園教諭も含めて保育者になろうとする全ての学生に対していえることだが、保育所という機能の役割を踏まえて、ここでは保育士を主として考えていく）、これから保育現場で出会う様々な家族と共に、子どもにとって最善の利益を考えながら保育にあたらねばならない。序論でも述べた通り、家庭との連携は、なくてはならないものである。

物事を見たり、考えたりするとき、人は少なからず自分自身の経験や知識を基に判断したり、理解するということを前提にするならば、保育士自身の育ちや家族に対する考え方というものも気になる点である。経験を積むことで考え方に変化も表れることを考慮し、ここでは、保育経験がまだない保育士志望学生の家族観を明らかにしていく。

また、同世代の若者の家族観と比較することで、保育士志望学生の特徴的な家族観が浮き彫りになるのか、あるいは特に相違はなく、現代の若者の家族観として捉えられる結果となるのか、以上の点についても明らかにすることを目的とする。

#### (2) 調査の方法

本調査は2003年9月に、本学保育学科保育専攻（保育士志望の学生が多数在籍）の一年生156名及び群馬県内の私立専門学校医療福祉系学科（卒業後の進路は医療事務や受付が殆ど）の一年生100名を対象に実施した。

家族構成やそれぞれの家族に対する思いなどを含めた質問を一つ一つあげながら、なるべく誤解

の無いように説明を行い、聞き取りによる一斉調査を行った。無記名式で、回答は各学生が回答用紙に記入をしていくという方法を取り、終了後、その場にて回収を行った。

回収率は、いずれも100%であったが、対象の同一条件を満たすため、次のいずれかに該当する学生の回答は今回の調査では省くこととした。

- ・男子学生（医療福祉系の7名）
- ・20歳以上の学生
- ・一人暮らしの学生
- ・回答に不備のあったもの

よって、有効回答数は、本学保育学科学生（以後、A保育と記す）144名、ならびに専門学校医療福祉系学科学生（以後、B医福と記す）85名であった。全て、2003年9月現在、18～19歳の一年生、家族と同居の女子である。

### （3）調査の結果と考察

#### ①対象学生の年齢について

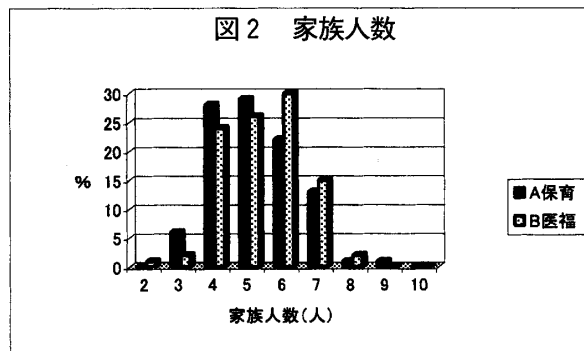
対象A保育の学生は144名中、71名が18歳、73名が19歳、対象B医福の学生は85名中、45名が18歳、40名が19歳と、いずれの平均年齢も調査期日において18.5歳と全く同じであった。

#### ②家族人数について

家族は（自分も含めて）何人いるか、という問に対しての回答は図2の通りである。ここでは、学生に対して、家族の定義や概念は述べていない。学生一人一人が「自分の家族だと思う」家族の構成員の数を答えたものである。

A保育では、一番多かった回答が5人家族（29%）と4人家族（28%）でほぼ同率、次いで6人（22%）、7人（13%）、3人（6%）、8人（1%）、9人（1%）となり、2人以下あるいは10人以上という回答は0であった。

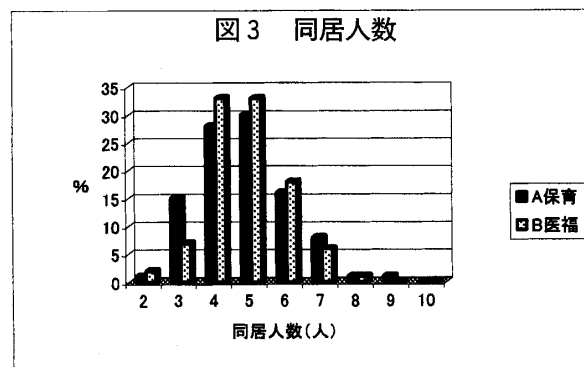
B医福では、6人（30%）、5人（26%）、4人（24%）、7人（15%）、3人（2%）、8人（2%）、2人（1%）という結果となった。



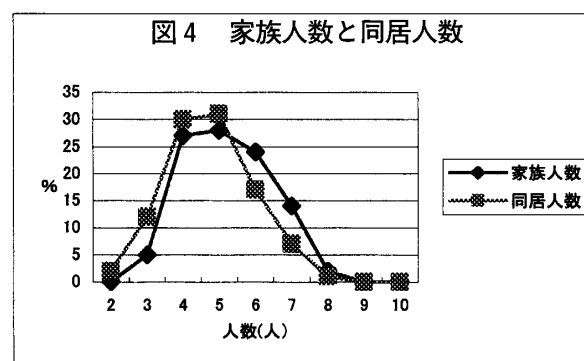
この結果から、家族の人数としては、4・5・6人がごく平均であり、3人以下の小家族は全体の5%であることがわかった。

#### ③同居人数について

実際に同居している家族は何人か、という問に対しての回答は図3の通りである。



ここで、前問の家族人数に対する回答と、同居人数の回答とで違いが表れた。その全体値の比較を図4に記す。



家族人数よりも実際の同居人数の方が少ないということから、居住を別とする家族の存在が明らかになっている。そして、逆の視点からみると、居住を同じくしていても家族の構成員として

考えられているということが出来る。

これは、家族の定義や概念に関連してくるであろう。森岡清美は、「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な構成員とし、成員相互の深い感情的包絡で結ばれた、第1次的な福祉追及の集団である」と定義付けしている<sup>7)</sup>。また、山根常男による家族概念の枠組みによれば、家族は5つの意味をもっており、それらは(1)血縁や婚姻といった関係としての家族、(2)居住の共同を基礎とした生活集団としての家族、(3)時間的にみて生涯所属するものではない、人生の経過過程としての家族、(4)未婚も含めて人生の様々な過ごし方の1つとしての、生活様式としての家族、(5)家族という生活様式のみが社会的に制度化されていることから、制度としての家族、といった5側面をあげている<sup>8)</sup>。現代の家族としては、この形態が多様化していることも事実であろう。例えば、父親の単身赴任のように血縁関係があっても居住が別であったりするケースなど、世帯構造の複雑性が背景にあると考えられる。

#### ④家族構成について

同居・別居も含めて、家族員の有無に関する問を通して見えてきた学生の家族構成は以下の通りである。

まず、父親に関しては、図5-1、5-2からも明らかなように、父親自体いないといったケースはごく僅かであった。離婚率が高まりをみせる昨今において、今回の対象学生に関しては、そうしたケースがなかったのか、あるいは別居の父親

図5-2 父親の有無 (B医福)

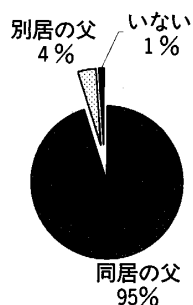


図6-1 母親の有無 (A保育)

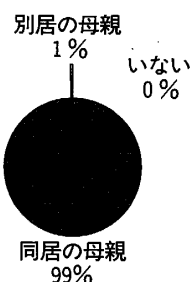


図6-2 母親の有無 (B医福)



図7-1 祖父の有無 (A保育)

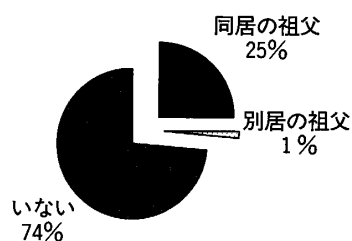


図7-2 祖父の有無 (B医福)

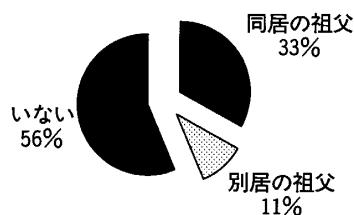


図5-1 父親の有無 (A保育)

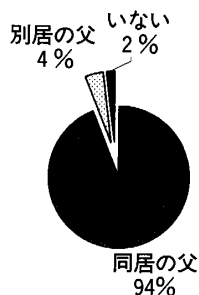


図8-1 祖母の有無 (A保育)

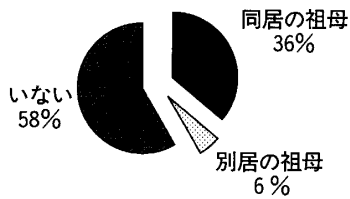
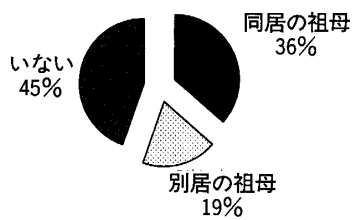


図8-2 祖母の有無 (B医福)



の数が単身赴任等も含めて離婚後の父親を含んでいるものなのかは定かでないが、「いない」と「別居」を合わせると、全体の5%程度になることがわかった。

次に、母親に関してしてみると、図6-1、6-2に表れた結果のように、ほぼ100%の学生に同居している母親がいることがわかる。

祖父については、図7-1と7-2に、祖母については、図8-1と8-2にそれぞれ結果を示したので参照されたい。

このデータから、同居・別居を問わず、祖父よりも祖母の存在率の方が高めであることが読み取れる。これは、女性の平均寿命が男性を上回っていることの証左となる結果であるといえよう。

同居の数に着目すると、A保育の学生の25%が祖父と、36%が祖母と、そしてB医福の33%が祖父と、36%が祖母と同じ家で生活しているという実態がわかった。祖父母両方がいる場合、祖父のみ、祖母のみと構成の違いはあるけれど、逆に祖父も祖母もいない、あるいはいても同居はしていないといったいわゆる核家族の割合は、A保育で57% (144世帯中、82世帯)、B医福で56% (85世帯中、48世帯)

という結果となった。核家族化がいわゆる昨今において、この割合はいかに捉えることができるであろうか。今回の調査対象が18~19歳ということも考慮すべき点ではあるが(年齢が下がるごとに祖父母の存在率は高くなるとも考えられる)、同時に全国レベルでの調査結果からは得られない、地域性を表出しているとも解することができる。

また、この家族構成に含まれる祖父母とは、全て同居対象である父方の祖父母を意味し、別居している母方の祖父母は含めていない。これは、学生自身が答えた家族人数や家族構成の中に初めから含まれていなかったためである(このことも家族の定義や概念について考える上で興味深い点である)。故に、母方の祖父母を含めたならば、その有無に関する割合は変化するという点を補足しておく。併せて、若干名ではあるが、家族構成員の中におじやおば、姉の夫である義理兄、姪、曾祖父(全て同居)といった回答が含まれたいたことも付記しておきたい。

そして、兄弟姉妹数についての問に対する結果が図9であり、2人きょうだい(A保育の50%、B医福の56%)次いで3人きょうだい(A保育の41%、B医福の36%)が多いことが読み取れる。4人以上も僅かではあるが、一人っ子の割合がA保育で6%、B医福で5%であるということからも、彼女たちが生まれた1984~85年付近の出生率動向がうかがえる。一人っ子が増加傾向にあるのは、1980年代後半からという前述のデータからも、少なくとも今の時点での18歳はきょうだいと共に

図9 きょうだい数

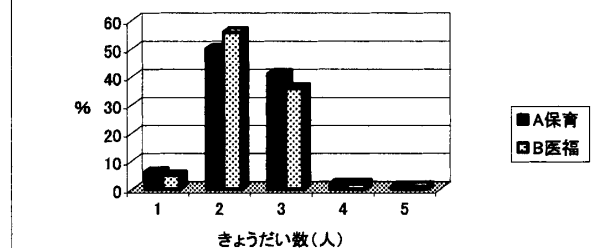


図10-1 きょうだいの構成 (A保育)

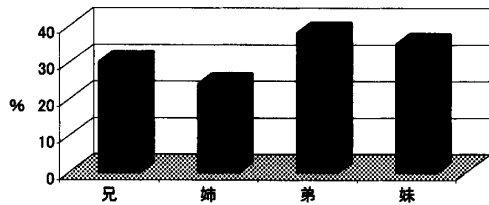


図10-2 きょうだいの構成 (B医福)

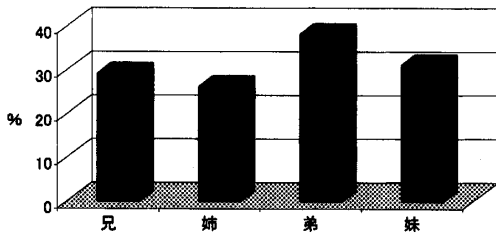


図11-1 長女 (A保育)

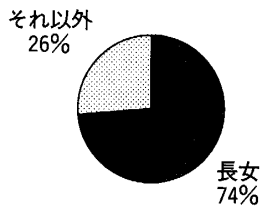
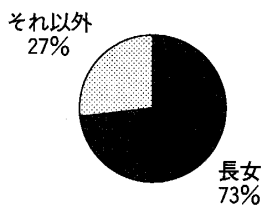


図11-2 長女 (B医福)



育ってきた経験をもつ世代であるとみることできょう。

そして、きょうだいがいる回答者にその構成を問うた結果が図10-1と10-2である。兄や姉に対して、弟や妹をもつ（あるいは両方がいることも考えられるが）学生の方が若干多かった。このことは、保育や福祉の仕事に就こうとする今回の

図12-1 第一子 (A保育)

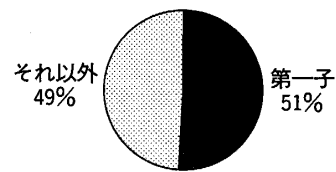
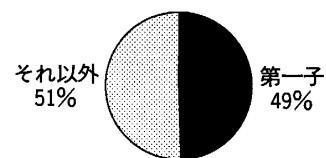


図12-2 第一子 (B医福)



回答者の職業意識に何らかの形で影響してきた可能性があることも否めないのではないだろうか。

実際に、長女あるいは第一子として生まれた学生がどれほど含まれているのかについても結果をまとめたので、図11-1、11-2、12-1、12-2を参考に考察を試みたい。

以上のデータから、特別に第一子が多いといった傾向はないが、長女が多いということは明確である。これは、きょうだいの中に女子一人といったケースもしくは下に妹がいるケースであり、このきょうだい構成は、先にもふれた様に職業意識や性格といったことにも影響があるのか、今後検討していきたい点である。

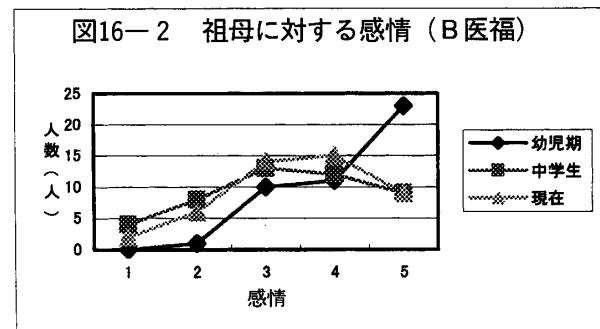
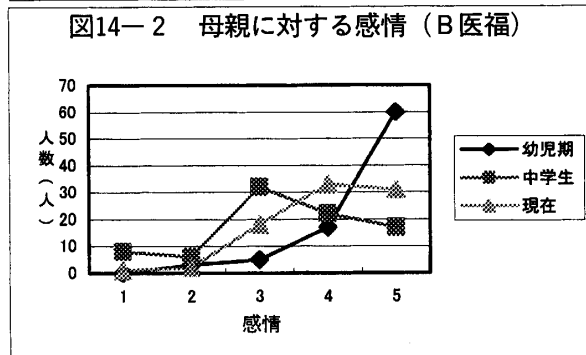
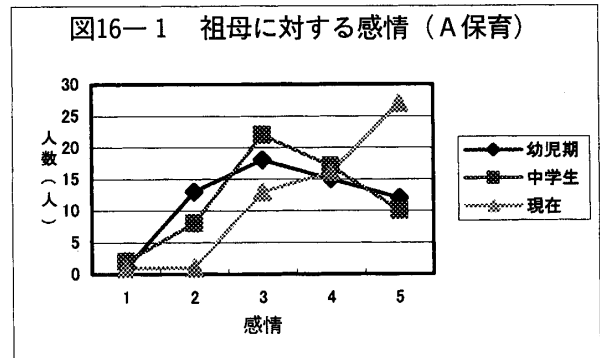
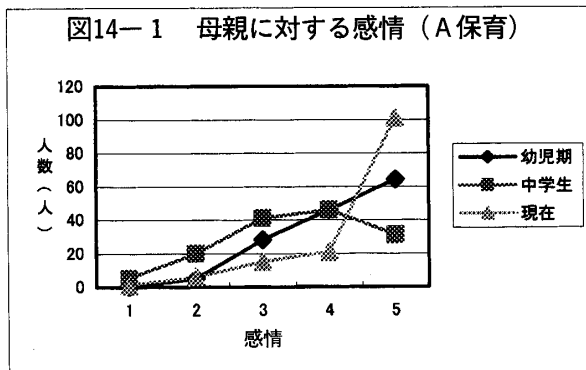
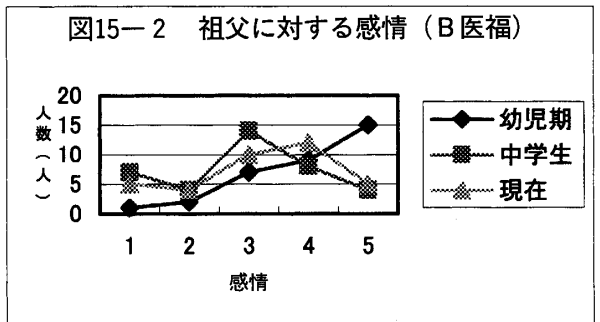
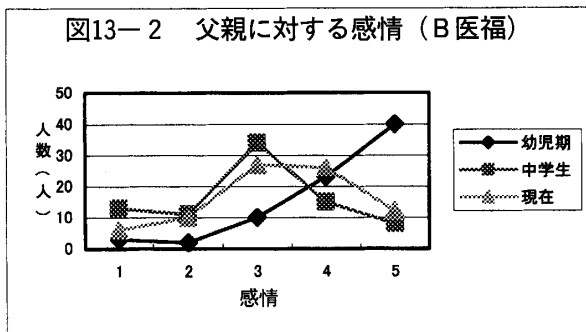
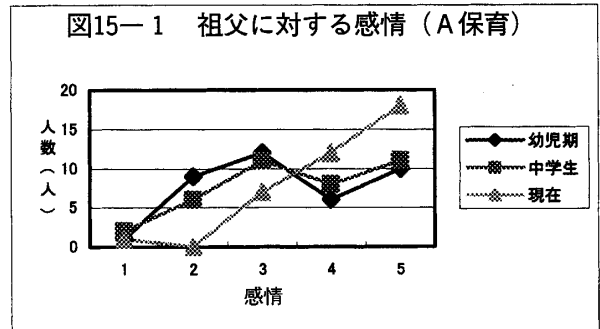
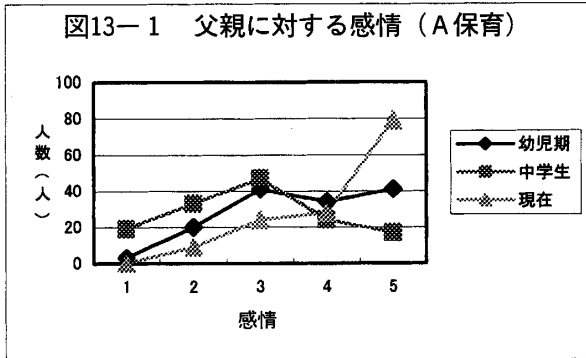
#### ⑤家族に対する感情について

家族構成が明らかになったところで、今度はそれぞれの家族に対する思いや感情を「幼児期」と「中学生」の頃、及び「現在」の3時期に分けて、数値化して回答してもらった。その結果は、対父親に関するものが図13-1と13-2、対母親が図14-1と14-2、対祖父が図15-1と15-2、対祖母が図16-1と16-2に示してある。感情軸の



数値1は否定的な感情(嫌いや苦手など)を表し、3は普通、5は好意的な感情(好きなど)を表している。2と4は、その中間でどちらかといえば否定的か好意的かということの意味している。図中の左の数字は、%ではなく回答者の人数を表しており、A保育とB医福では人数それ自体は違うことを付記しておく。

これまで、対象のA保育とB医福とでは、さほど差がない結果となっていたが、この家族に対する感情のところに来て、顕著な違いがみられた。それは、全体的に家族に対する「現在」の感情はA保育の学生が非常に好意的であることがうかがえる点である。それに対し、B医福の学生は、「幼児期」が一番好意的な感情をもっていた時期である。



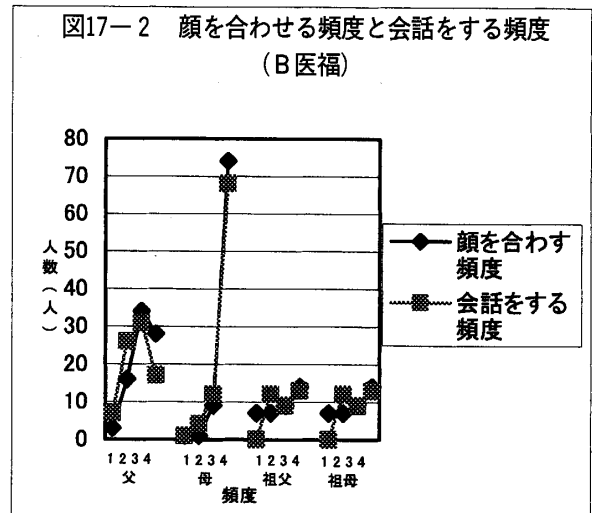
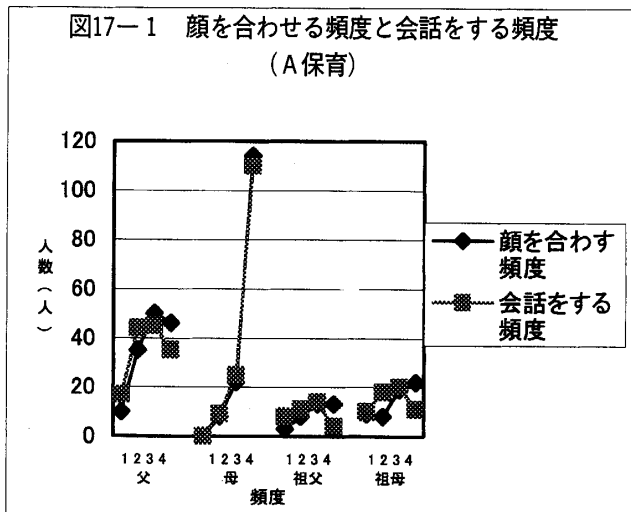
り、「現在」は人によるばらつきがみられるものの、「幼児期」ほど高い数値とはなっていない。

共通していえることは、「中学生」の時期の感情が他の時期に比べて、普通あるいは否定的な方にあるということであろう。これは、思春期といった時期との関連が考えられる。18あるいは19歳になった現在、過去を振り返って人生の経過時期における感情の変化を学生自身、自覚しているようだ。

次に、家族と過ごす時間の減少が指摘される昨今、実際に家族とどれくらい顔を合わせているのか、そして会話はどの程度あるのかについても調査をした。結果は、図17-1と17-2の通りである。図中、左から対父親、対母親、対祖父、対祖母と、対象となる人物を示している。頻度は、1が「全く顔を合わせない」、あるいは「会話をしない」で、4が「よく合う」、「よく会話をする」、となっている。2と3についてはその間の頻度を意味する。

対象としては、圧倒的に母親と一番多く顔を合わせ、会話を頻繁にしているという傾向が見て取れる。それに対し、父親との交流が少ないことも顕著である。祖父母に関しては、対象がいる学生のみが回答しているので、全体的に数は少ないが、特にA保育において、顔を合わせているわりに会話をしていないという実情は気になる点である。

この結果を反映して、家族の中で一番好きなの



は誰か、という問に対して両対象共に一番多かったのが、母親という回答であった。また、きょうだいがいる場合は、兄や姉という回答も多数得られた。色々な話ができるというのが一番の理由のようである。このことから年齢の近いきょうだいの存在の大きさが改めて感じられる。

#### ⑥家族観について

「家族とは・・・？」といった問に対し、それぞれの学生から出た言葉を表1-1と1-2に羅列した。無回答は除いた全ての回答を順不同で列記してある。学生自身のそのままの言葉から、若者の家族に対するイメージが読み取れる。そこからは、家族の精神的なつながりの重要性を改めて認識することが出来た。

#### ⑦結婚観について

未婚・非婚・晩婚化といった言葉を頻繁に耳にするようになった現在において、20歳前の学生たちが、どのような結婚観をもっているのか、ここでは、結婚したい年齢(初婚年齢)と子どもを生みたい年齢(初産年齢)、及びもちたい子どもの数について聞いた結果を図18-1、18-2、19にそれぞれまとめた。

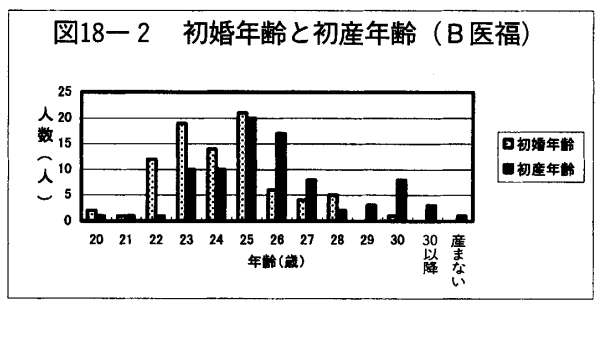
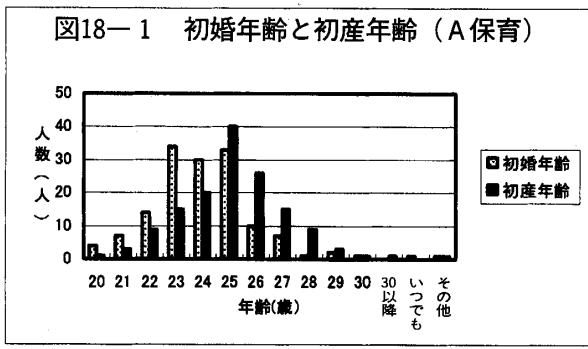
A保育の学生が考える初婚年齢は、23～25歳辺りが多い結果となった。同時に、20・21歳と答えるものもあり、卒業後すぐにでも結婚をと考える

表1-1 家族観 (A保育)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・素が出せる場所。</li> <li>・いてあたりまえの存在。自分を隠さないでいられる場所。</li> <li>・自分の居場所。どんな自分も見せられる大切な空間。</li> <li>・甘えられる場所。</li> <li>・自分が自然でいられる相手。</li> <li>・必要不可欠な存在。かけがえのない人。</li> <li>・一番自分を心配してくれる人。</li> <li>・大切な存在。</li> <li>・支え。</li> <li>・いてあたりまえの存在。</li> <li>・いてあたりまえ。</li> <li>・重かったり邪魔だったりするけれどいてほしい。</li> <li>・頼りにしている。</li> <li>・一番気を使わないところ。</li> <li>・偉大。</li> <li>・大切。</li> <li>・落ち着ける場所。</li> <li>・色々とうるさかったりするけれど、一番落ち着ける、甘えられる、大切で絶対に必要な存在。</li> <li>・自分のことをわかってもらえている。</li> <li>・いなくてはならないもの。</li> <li>・気をつかわなくていい、安らげる場所。</li> <li>・離れないでいてくれる存在。</li> <li>・なくてはならない存在。</li> <li>・空気みたいな存在。いてあたりまえ。</li> <li>・癒される。</li> <li>・自分を育ててくれる人たち。</li> <li>・自分が生きていくうえで、欠くことのできない大切なもの。</li> <li>・いるとうるさいけれど、いないと寂しい。</li> <li>・家に帰れば、いつもいて待っていてくれる。</li> <li>・一番安らげる、落ち着ける場所。</li> <li>・心を落ち着かせる場。</li> <li>・ありのままでいられる場所。</li> <li>・大切な存在。</li> <li>・支え。</li> <li>・大切な人。</li> <li>・自分にとって、すごく必要な人。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安らぎ。</li> <li>・なくてはならないもの。</li> <li>・大事な人たち。</li> <li>・必要なもの。いなければ困る、大切なもの。</li> <li>・わがママが通用する。</li> <li>・大切な存在。</li> <li>・一番身近な存在。</li> <li>・必要なもの。</li> <li>・一番大切なもの。</li> <li>・一緒に生活している人。</li> <li>・落ち着くところ。</li> <li>・なくてはならない存在。</li> <li>・支えあっている。</li> <li>・自分の帰るところ。</li> <li>・大切な人たち。</li> <li>・自分を支えてくれる人。</li> <li>・大切な存在。なくてはならないもの。</li> <li>・自分を手助けしてくれる。</li> <li>・何でも話ができて、素直でいられる空間。</li> <li>・なくてはならない存在。</li> <li>・妹の見本。</li> <li>・大事な人たち。絶対に嫌になれない。</li> <li>・自分にとって、いなくてはならない人。</li> <li>・どこかで深くつながっている。</li> <li>・帰る場所。</li> <li>・かけがえのない、大切なもの。</li> <li>・なくてはならないもの。大切なもの。</li> <li>・いなくてはならない存在。</li> <li>・落ち着ける場所。</li> <li>・生きるパワー。</li> <li>・自分を育ててくれた、かけがえのない人。</li> <li>・一番大切なもの。</li> <li>・嫌いだけれど、かけがえのない人たち。</li> <li>・「嫌い」と思ったり、「いなくなればいい」と思うときもあるけれど、やっぱり大切。</li> <li>・うるさいときもあるけれど、なくてはならない存在。</li> <li>・大切なもの。一緒にいて元気になれる。</li> <li>・かけがえのない、大切な存在。</li> <li>・素でいられる関係。</li> <li>・居心地の良い場所。</li> <li>・大切。</li> <li>・いざというときに助け合える、大切なもの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を育ててくれた人たち。</li> <li>・不安なときなどに、一緒にいたくなる。</li> <li>・いてあたりまえの存在。どんな態度をとっても、変わらずにソコにあるもの。</li> <li>・困ったときに助け合えるもの。</li> <li>・お金では買えない大切な宝物。</li> <li>・あまり理想の家族とは言えないが、父と母は理想の夫婦。</li> <li>・なくてはならないもの。大切な人たち。全てを受け入れてくれる人たち。</li> <li>・いつも味方でいてくれる人。</li> <li>・嫌なことも良いことも何でも思ったことを言える。受け入れられる、自分を受け入れてくれる。</li> <li>・一番嫌なところを見せられる。あたりまえの存在。絶対に切れない。</li> <li>・普通に隣にあるもの。</li> <li>・自分が成長できる場所。</li> <li>・とても温かくて、安心できるところ。</li> <li>・かけがえのない大切な人。</li> <li>・なくてはならないもの。</li> <li>・大切。</li> <li>・理想の家族ではないけれど、両親は理想の夫婦。</li> <li>・一番大切な人たち。みんないてあたりまえで、いなくなったら家族のバランスが崩れる。</li> <li>・何があっても捨てられない存在。</li> <li>・かけがえのないもの。</li> <li>・とてもかけがえのないもの。(父が亡くなってから、わかった) いざというときに助けしてくれるもの。</li> <li>・なんだかんだ言っても、いざというときに頼れる人。</li> <li>・帰る場所。</li> <li>・帰ったらいる、あたりまえの人たち。</li> <li>・一番小さな社会。</li> <li>・(自分がだらけているので)注意してくれる人たち。</li> <li>・一生大切なもの。</li> <li>・気をつかわなくていい人。</li> <li>・どんなことがあっても、離れられない存在。他の人に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>は言えないことも、家族に なら言える。</li> <li>・大切なところ。</li> <li>・本当に悩んでいるときに、 一番の支えになってくれる 人。</li> <li>・自分を支えてくれる人た ち。</li> <li>・大切なもの。</li> <li>・一番大切なもの。</li> <li>・自分を支えてくれる、一番 の存在。</li> <li>・大切。自分を一番理解して くれる。</li> <li>・一番ホッとできる場所。</li> <li>・なくてはならないもの。</li> <li>・一番リラックス(安心)で できる場所。</li> <li>・くつろげるところ。</li> <li>・つらいときに助けてくれる もの。</li> <li>・色々な意味で、帰る場所。</li> <li>・帰る場所。</li> <li>・太陽。宝物。いつも輝いて いて、自分に光を照らして くれている。</li> <li>・なくてはならない存在。</li> <li>・とても大切で、必要な人。</li> <li>・大切なもの。</li> <li>・いてあたりまえの存在。</li> <li>・安心できる場所。</li> <li>・一度は離れて暮らしてみたい が、家族がいないと寂し いかも。</li> <li>・心の支え。</li> <li>・自分にとって一つ。</li> <li>・大切なもの。</li> <li>・一番自分を大切に思ってい る人たち。</li> <li>・切れないつながり。</li> <li>・なんだかんだ言っても、と ても大切な存在。</li> <li>・何でも話ができて、くつろ げる。なくてはならないも の。</li> <li>・元気の源。</li> <li>・一番安心できる場所。</li> <li>・今はわからない。いつかわ かるときが来ればいいと思 う。</li> <li>・甘えられる場所。</li> <li>・大切。一緒にいると落ち着 ける。</li> <li>・何かあったときに、一番落 ち着くところ。</li> </ul>
--	---	--	--

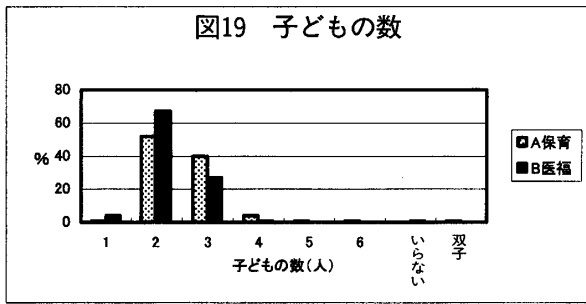
表1-2 家族観 (B医福)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・大事。いないと生きるのもつらい。</li> <li>・友達とは別の存在。最終的に頼れる存在。</li> <li>・なくてはならないもの。</li> <li>・恥ずかしくなく、何でも言える存在。</li> <li>・最終的には一番の理解者。</li> <li>・支え。</li> <li>・自分にとって、心と生活の支え。</li> <li>・(日常生活ではむかつくことばかりだけれど) いないと困る。</li> <li>・味方。</li> <li>・必要不可欠な存在。</li> <li>・あたりまえのもの。いないと寂しい。</li> <li>・いつも見ていてくれる。</li> <li>・自分のことを最後まで見届けてくれる。</li> <li>・かけがえのないもの。いつも安心させてくれる、大切な環境。</li> <li>・全然気をつかわなくていい。一緒にいて楽。</li> <li>・良き理解者。温かい感じ。</li> <li>・(親がいない人もいるけれど) 自分にとっては、いてあたりまえの存在。</li> <li>・いなければ困る存在。</li> <li>・かけてはいけないもの。</li> <li>・素の自分でいられる場所。自分の味方。</li> <li>・思っていることを何でも言える。</li> <li>・自分自身をよくわかってくれる存在。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大切にしなければならないもの。</li> <li>・そばにいてあたりまえ。</li> <li>・世界で一番大切なもの。失うことを考えられない存在。いるのがあたりまえ。</li> <li>・信頼。</li> <li>・自分がつまずいたときに、背中を押してくれる存在。応援してくれたり、励ましたりしてくれる。大切な人。</li> <li>・嫌なところも多いけれど、一人でも欠けたら寂しい。</li> <li>・大切なもの。</li> <li>・とても大切。</li> <li>・なんだかんだ言っても、必要。</li> <li>・大切。いないといや。</li> <li>・本当に自分のいるべき場所ではない。</li> <li>・大切な人。</li> <li>・話しやすい。落ち着く。</li> <li>・家族がいてこそ、毎日の生活が送れる。</li> <li>・いなければ困る存在。大好き。</li> <li>・好きな人と好きな場所。</li> <li>・いなければ生きていけない、大切なもの。ホッとする空間。</li> <li>・一緒に生活している人たち。</li> <li>・いるのがあたりまえの存在。</li> <li>・色々相談できて、自分のことをよく知っている。</li> <li>・結局は、なくてはならない存在。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はっきり好きとは言えないが、大切。</li> <li>・いつも一回は会う人たち。</li> <li>・くつろげる場所。</li> <li>・友達とは違った居心地の良さがある。温かい。なくてはならないもの。</li> <li>・切っても切れない。</li> <li>・言わなくてもわかってくれる。</li> <li>・一緒にいて、疲れない人。けんかしても、いつの間にか仲直りしている人。</li> <li>・ずっと大切にしていきたい。ずっと仲良くしていきたい。</li> <li>・温かいところ。</li> <li>・ホンネでぶつかり合えて、ホンキで信頼できる。</li> <li>・いてあたりまえ。いないのは考えられない。</li> <li>・いつも近くにいる、大切な人たち。</li> <li>・落ち着く場所。</li> <li>・大切な人たち。</li> <li>・何かあったときに、一番近くで支えてくれる。</li> <li>・支援者。</li> <li>・思ったことを何でも言える。気をつかわない。</li> <li>・自分の裏表を隠さずに、素直になれる存在。いなければならぬ、とても大切な人。</li> <li>・一番身近で、頼れる存在であるべきもの。</li> <li>・気をつかわなくて、一番落ち着くところ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・血以外に心がつながっている、自分の居場所があるところ。</li> <li>・一番信頼できる人。</li> <li>・かけがえのない存在。</li> <li>・素でいられるところ。</li> <li>・かけがえのないもの。</li> <li>・とても大切なもの。</li> <li>・あたりまえにいる存在。</li> <li>・生きていく支え。</li> <li>・あたりまえのようにあるもの。</li> <li>・死ぬまで一緒にいる、切っても切れない人たち。一番大切な人。</li> <li>・一緒にいると安心する。</li> <li>・一緒にいると落ち着く。安心できる。</li> <li>・とても大切な存在。</li> <li>・頼れる存在。一緒にいると安心できる。気をつかわなくていいので、楽。</li> <li>・ファミリー。</li> <li>・愛がある。協力し合い、いつでも笑顔。</li> <li>・大切。</li> <li>・安らぎの場所。</li> <li>・支え合い。とても大事な存在。</li> <li>・なくてはならない、大切なもの。ある意味、空気のような感じ。</li> <li>・大切なもの。</li> <li>・適当。気をつかわない人の集まり。</li> <li>・ずっと一緒にはいないけれど、大切なもの。</li> <li>・帰れる場所。</li> </ul>
---	--	--	--



傾向も見取れた。B医福については25・23・24・22歳の順となっている。晩婚化がいわれる現在だが、30歳過ぎてからの結婚を今時点で考えているものはほとんどいないということがわかった。

そして初産年齢に関しては、A保育では、25歳が一番多く、その前後で年齢が離れるごとに数も減少するといった結果となっている。これに対し、B医福では、やはり25歳が最多となっているもの



の、回答にはばらつきが見られ、30歳といった意見もあげられていた。また、子どもはいらぬという回答も含まれ、意識の多様性をうかがいすることができる。A保育の学生は、子どもが好きであるといった特性上、B医福の学生よりも子どもを早くもち、そして子どもの数も多く望んでいる傾向にあるようだ。ただし、いずれにしても子どもは1人という回答がほとんどなかったことも注目すべき点であろう。深刻な少子化が現状にある

表2-1 結婚観 (A保育)

<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の大切な人をつくる。幸せなこと。</li> <li>一回はしてみたいもの。離婚はいやだ。自分・家族以外に大切なものが増えて喜べる。幸せになりたい。</li> <li>幸せな場所。</li> <li>幸せになる。</li> <li>夢。第二の人生。</li> <li>大変そう。</li> <li>ずっと仲良し。</li> <li>人生の新しいスタート。</li> <li>自由がなくなる。</li> <li>第二の人生のスタートライン。</li> <li>温かいところ。</li> <li>新しいスタート。</li> <li>自分の幸せ。</li> <li>自分にとって最大の決断。</li> <li>家族の絆をつくっていくもの。</li> <li>人生の新たなスタート。</li> <li>ゴールイン。</li> <li>幸せな新しい生活のきっかけ。</li> <li>色々あって大変だと思う。</li> <li>理想の家庭をつくりたい。</li> <li>幸せなこと。</li> <li>家族をつくること。</li> <li>新しい生活。</li> <li>一人ではなく、二人で力を合わせて頑張る。</li> <li>自分が安心できること。</li> <li>まだよくわからない。</li> <li>幸せになるためのもの。</li> <li>新しい人生。</li> <li>幸せ。</li> <li>自分の新しい家庭づくり。幸せ。</li> <li>お互いを想いながら、幸せをつくること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>幸せになりたい。</li> <li>新しいスタート。</li> <li>幸せ。</li> <li>楽ができる。</li> <li>新しい生活。</li> <li>幸せ。</li> <li>幸せなこと。</li> <li>幸せ。</li> <li>想像できないもの。</li> <li>新しい家族。</li> <li>最高のパートナーづくり。</li> <li>人生のスタート。</li> <li>よくわからないもの。</li> <li>新生活。</li> <li>幸せ。</li> <li>生活。</li> <li>幸せな家庭。</li> <li>よくわからない。</li> <li>自由の終わり。しなくてもいい。</li> <li>新しい人生。</li> <li>もう一つの家族。</li> <li>生活すること。</li> <li>自分の力で家族をつくる。</li> <li>幸せをつくること。</li> <li>新しい生活。</li> <li>幸せ。</li> <li>幸せ。</li> <li>幸せな家庭を築くためのもの。</li> <li>「守りたい」と思える場所をつくること。</li> <li>別にしなくてもいい。でも、子どもは欲しい。</li> <li>幸せを増やしていくこと。</li> <li>新しい家族ができる。</li> <li>普通のこと。</li> <li>夢。</li> <li>始まり。</li> <li>好きな人とずっと一緒にいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>幸せな生活。</li> <li>まだよくわからない。</li> <li>楽しむもの。</li> <li>人生の中の最大の決意。</li> <li>幸せ。</li> <li>幸せ。</li> <li>幸せ。</li> <li>幸せをつくるもの。</li> <li>一緒に歩む。</li> <li>新たな家庭をつくる一歩。</li> <li>自立。</li> <li>共に歩み、前進する。</li> <li>新しい生活の始まり。</li> <li>新しい人生の始まり。</li> <li>幸せ。</li> <li>夢。</li> <li>自分にとって一番大切な人と家庭をつくる一つ目の段階。</li> <li>安心。</li> <li>愛する人と共に歩む道。</li> <li>自分が幸せになれること。</li> <li>幸せ。</li> <li>新しい家庭をつくる。</li> <li>家族を大事にしたい。</li> <li>しばられるもの。</li> <li>いつか帰るところを手に入れること。</li> <li>新しい自分の家族ができること。</li> <li>支え合っていくもの。</li> <li>憧れ。</li> <li>憧れ。</li> <li>新たな人生の始まり。</li> <li>幸せ。第二の人生。</li> <li>憧れ。</li> <li>自然の流れ。</li> <li>安らげる場所。</li> <li>楽しみ。</li> <li>幸せになる。</li> <li>青春の終わり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい家族ができて、新しい人生。</li> <li>夢。</li> <li>願い。</li> <li>好きな人と一緒になれる。</li> <li>人生最大の夢。</li> <li>よくわからない。</li> <li>人生最大の幸せ。</li> <li>第二の人生。</li> <li>相手によるもの。</li> <li>一生のもの。</li> <li>新たな人生の始まり。</li> <li>しばられるもの。</li> <li>幸せになるもの。</li> <li>人生で一番重要なテーマ。</li> <li>未知の世界。</li> <li>分かれ道。</li> <li>ほかほか。</li> <li>違う人生。</li> <li>まだよくわからない。</li> <li>人生最大のかけ。</li> <li>家庭。</li> <li>新しい生活。楽しい生活。</li> <li>早めになりたい。</li> <li>新たな人生。</li> <li>一番の幸せ。</li> <li>願望。</li> <li>好きな人と幸せになること。新しい人生のスタート。</li> <li>落ち着く。</li> <li>願い。</li> <li>新しい人生のスタートライン。</li> <li>独立すること。</li> <li>憧れ。</li> <li>幸せ。温かい。</li> <li>幸福とは限らない。</li> <li>幸せへの道。</li> <li>幸せな家族。</li> </ul>
--	---	--	---

表2-2 結婚観 (B医福)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・してもいいし、しなくてもいいもの。</li> <li>・好きな人とずっといられる。子どもが欲しいから、結婚する。家族をつくる。</li> <li>・一生に一度だけの一大イベント。</li> <li>・第二の出発点。</li> <li>・幸せ。</li> <li>・全然わからない。</li> <li>・めんどくさそう。</li> <li>・幸せ。</li> <li>・幸せ。新たな始まり。</li> <li>・理解し合い、支え合っていくこと。</li> <li>・人生の一大イベント。</li> <li>・将来のこと。</li> <li>・幸せの始まり。</li> <li>・自分の新しい家族をつくること。大切なものをつくる。</li> <li>・その人の子どもを産んで、一緒に色々なことを乗り越えていく。ずっと一緒にいたいと思うこと。</li> <li>・色々な面での安定。</li> <li>・大変。</li> <li>・本当の幸せ。</li> <li>・信頼。</li> <li>・支え合うこと。</li> <li>・新しい家族をつくること。平凡でも、自分にとって一番の幸せ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからない。</li> <li>・将来一人で死ぬのはいやなので、一緒に死んでくれる人？自分の子どもを産むこと。家族をつくること。</li> <li>・安定した生活。</li> <li>・生活の中で助け合ったり、支え合ったりするパートナー。</li> <li>・幸せになること。</li> <li>・幸せになること。家族で幸せに暮らすこと。</li> <li>・幸せになること。</li> <li>・好きな人と新たな生活を始めること。</li> <li>・新しい家族がまた増える。</li> <li>・幸せな家庭を築くこと。</li> <li>・幸せになるためのもの。</li> <li>・何でも受け入れてあげられる、受け入れてもらえる。</li> <li>・幸せなもの。</li> <li>・お互い、相手のことを理解できて、受け入れられる。一番大事なのは、お互いが愛し合っていること。</li> <li>・もし、チャンスがあればする。別にしなくてもいい。</li> <li>・幸せな家庭をつくる。</li> <li>・一つの幸せを分け合う。</li> <li>・人生で最もしたいこと。</li> <li>・本当に好きな人と家族になり、ずっと一緒にいること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幸せで大切なもの。</li> <li>・自分で家族をつくっていく。</li> <li>・ずっと付き合っていくこと。</li> <li>・一緒にいて疲れない人と暮らすこと。</li> <li>・自分のことを全て受け入れてくれる人と暮らすこと。</li> <li>・不安もたくさんあるけれど、新しい家族ができるということは、すごく幸せなこと。</li> <li>・人生で大きな決断。</li> <li>・人生で一番大きな決断。幸せの一步。</li> <li>・憧れ。</li> <li>・好きな人と、大切な人とずっと一緒にいたい。家族になりたい。その人にとっての特別な存在でありたい。</li> <li>・第二の人生。新しい生活。</li> <li>・第二の楽しい人生。</li> <li>・お互いに支え合う。</li> <li>・楽しく暮らすこと。</li> <li>・子どもを増やす。</li> <li>・人生を大きく変えること。</li> <li>・第二の人生。</li> <li>・好きな人と一緒になること。</li> <li>・自分の家族をつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな人と一緒にいられるようになること。</li> <li>・一緒に住むこと。</li> <li>・よくわからない。</li> <li>・スタートライン。</li> <li>・一回はしてみたいこと。</li> <li>・わからない。</li> <li>・人生のターニングポイント。</li> <li>・二人で幸せをつくっていくこと。</li> <li>・幸せ。</li> <li>・わからない。</li> <li>・好きな人と幸せになること。</li> <li>・幸せ。</li> <li>・安らげる場所。幸せ。新生活の始まり。</li> <li>・第二の人生。</li> <li>・子どもにも愛をそそぎ、相手にも恋をしていたい。</li> <li>・夢。でも現実的には大変。</li> <li>・新たな人生のスタート。</li> <li>・人生で一番大きな選択。</li> <li>・新しい人生のスタート。</li> <li>・わからない。</li> <li>・新しい旅立ち。</li> <li>・わからない。</li> <li>・わからない。</li> <li>・お互いを信じて、支え合うこと。</li> </ul>
--	---	--	--

中で、子どもをもちたいと思える人が増えていくことは重要な意味をなしている。しかし、理想と現実との狭間で、その確約性はないが、現在の10代の若者が結婚を経て、子どもを生む時期に至る頃、子育てが今よりもしやすい環境になっていることを切に願う。

結婚や出産とは、家族形態に大きな変容をもたらすものである。婚姻によって配偶者とその近親といったように、血縁関係のない人たちと家族の結びつきを形成し、また出産によって新たな家族を迎えることになる。様々な意味を含むものであるが、学生自身は結婚に対して、どのような意識をもっているのだろうか。家族観と同様に、「結婚とは・・・？」との問に対し、学生から出た言葉を表2-1と2-2に示した。「幸せ」という期待やイメージが多いなかで、「しばられる」「大変そ

う」といった声が聞かれることも若者の結婚観として、その背景にあるものを考えていかなければならない。

#### 4. おわりに

国民生活白書等のデータによって、戦後からの変容をみることで、さらに現代の家族像の特徴的な部分が浮き彫りになったように思う。家族は、それ自体も変化をしているが、やはり社会や環境からの影響は大きいといえよう。特に産業基盤の変化がもたらした現代家族への負荷は深刻なものであると考えられる。家族の定義や概念も複雑で多様化し、家族とは何なのかといった単純な質問にさえも1つの答えを導き出すのは困難である。逆に、家族の定義や概念は、その人自身が自分の家族の中で育ち、成長する過程において、その意

味付けをしていくものであるともいえる。

今回の実態調査からは、保育士志望学生の結婚も含めた家族観の一側面の部分を引き出すことができたのではないと思う。それは、単純に理解し得るものではないが、子どもが好きという気持ちの表れは随所にみられる結果であった。また、現在において、自分の家族に対して好意的な感情をもっていることから、学生自身が「家族」というものを良いイメージで捉えているとみることもできる。自分は大切にされているという実感、家族に愛されているといった実感、家族の中にいて心地よいと思えること、そして同時に自分も家族を愛しているという自覚、こういった感情をもっていることは人とかかわりをもつ保育士になるうえで、必要な資質であるともいえよう。残念なことに、子どもが愛せない親、愛したくても愛し方がわからない親、愛し方に偏りがあるなど、実際にはきれいごとで済まされない現実もある。そうした親の気持ちに、真の家族のような気持ちでかかわること、難しいけれど今、それが問われているのではないだろうか。

今回は、対象の同一性を維持するため、またサンプル数が不十分であるという理由から、男子学生や20歳以上の学生、及び1人暮らしの学生に関するデータは省いている。正確性をもって、このような対象についても同じ質問をしたならば、結果に何らかの違いが表れ、家族を考えるうえでの示唆が得られたかもしれない。また、今回は短期大学と専門学校の学生が調査対象であり、領域も

保育と医療福祉分野専攻と似通っている部分も多かったように思う。対象が四年制大学や大学院に在学中の他分野で学ぶ学生であったならば、キャリア志向を反映した結婚観や家族観が結果に顕れたかもしれない。保育者としての価値観と保護者の価値観を考えながら、保育士養成課程における家族援助のあり方について、今後も更なる検討を続けていきたい。

## 註

- 1)「児童福祉法」昭和22年12月12日法律第164号、改正 平成13年11月30日法律第135号
- 2)「児童福祉法の一部を改正する法律等の公布について」平成13年11月30日雇児発第761号、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知
- 3)内閣府編「国民生活白書（平成13年度）」ぎょうせい、2002年
- 4)内閣府「国民生活選好度調査」1997年
- 5)内閣府「国民生活に関する世論調査」2001年
- 6)NHK 放送文化研究所「国民生活時間調査」2000年
- 7)森岡清美・望月嵩「新しい家族社会学」（4訂版）培風館、1997年
- 8)山根常男「家族と人格—家族の力動理論をめざして」家政教育者、1986年

## 参考文献

- 1)石川実編「現代家族の社会学」有斐閣、1997年
- 2)柏女霊峰・山縣文治編「家族援助論」ミネルヴァ書房、2002年

(2003年9月30日 受理)

# A Study of Family Support ( I )

## —Through a Survey about Students' Views of Their Families—

Mika Kogure

### Abstract

It is specified in the child welfare laws that the job description of hoiku-shi \* includes not only caring for children but also supporting their families by giving advice about nursing and child-rearing to the parents and guardians. In recent years, aspects of the family have been going through a big transition. It is important to know about the current affairs of the family surrounding any child and to understand this is better for effective family support.

Consequently, this study is a snapshot of the contemporary family and gathers suggestions about family support in the process of educating hoiku-shi by the investigation of students' views of their families.

The results showed that the students who aspire to be hoiku-shi love children and have a favorable feeling towards their own family. This quality is an important trait in the hoiku-shi character and necessary for them to support the families that they work with.

\* hoiku-shi is the Japanese word for teachers and carers who care for children in a day care setting and are licensed.